

今、常忍じょうにん、貴辺きへんは末代むつだいの愚者ぐしやにして見思末断けんじみだんの凡夫也。身は俗に非ず、道どうに非ず、秃居士とく。心は善に非ず、悪に非ず、
 羝羊耳ていじやうのみ。然りと雖も一人の悲母堂ひもに有り。朝あしたに出でて主君ちゆうに詣で、夕ゆうべに入て私宅かりに返り、營えいむ所は悲母の爲め、存する
 所は孝心耳のこみ。而るに去月下旬きまげつの比ころ、生死せいじの理ことわりを示さんが爲めに、黄泉よみじの道みちに趣く。此こゝに貴辺きへんと歎なげいて言いく、齡よわい既に九旬じゆん
 に及び、子を留とどめて親の去ること、次第ついでたりと雖も、情つらみち、事の心を案あずるに、去りて後のち来きたるべからず。何れの月日つきひをか期こ
 せん。二母国にもくにに無し。今いまより後のちち誰たれをか拝かすべき。離別りべつ、忍しのび難がたきの間、舍利せりを頸のどに懸かけ、足あしに任まかせて大道だうだうに出いで、下州げしゆうよ
 り甲州かうしゆうに至いたる。其その中間ちゆうかん、往復わうふく千里せんりに及およぶ。国々くに皆みな飢饉ききんして山野さんやに盜賊たうそく充満ちゆうまんし、宿々しゆくしゆくに糧米りやうまい乏少ぼうしゆうなり。我われが身み、羸弱るいじやく、
 所ところ從亡じゆうきが若ごとく、牛馬ぎうま合期がうきせず。峨々がたる大山たいざん重々ちゆうちゆうとして、漫々まんまんたる大河たいが多々たなり。高山こうざんに登のぼれば頭かうべを天てんに摔うち、幽谷ゆうこくに
 下くだれば足あし、雲うんを踏ふむ。鳥あひに非あれば渡わたり難がたく、鹿かに非あれば越こえ難がたし。眼まなこ眩くるめ、足あし冷ひゆ。羅什らじき三蔵さんざうの葱嶺そうれい・役えんの優婆塞うぱさいの
 大峰おほみねも只今ただいまなりと云々。

(建治二年三月)